



2019年3月10日

日本看護系学会協議会・日本看護系大学協議会 【科研費審査システム改革 2018 の影響に関する調査報告】

科研費審査システム改革 2018 において審査システムが変更され、平成 30 年度科研費（平成 29 年 9 月公募）からの審査は「小区分・中区分・大区分」で構成される新しい審査区分で実施されました。改革の骨子は、審査区分表の改正、若手研究の応募要件の変更であり、その概要を以下に示しました。審査区分の改正は、看護学のみならず関連学問領域との競合となりました。若手研究は 1 本化され、博士の学位取得後 8 年が経過すれば、39 歳未満であっても若手研究には応募できなくなりました。

この度、平成 30 年度科研費（平成 29 年 9 月公募）の応募状況と結果を調査し、科研費審査システム 2018 の影響を検討するために、日本看護系学会協議会（JANA）は日本看護系大学協議会（JANPU）と協働して調査を実施したので、その結果を報告します。

【科研費審査システム改革2018における改正の骨子】

1) 審査区分表の改正

- 平成30年度科研費（平成29年9月に公募予定）からの審査は「小区分・中区分・大区分」で構成される新しい審査区分で行う。
- 小区分、中区分、大区分での審査において、研究の多様性に柔軟に対応するため、小区分では「〇〇関連」、中区分では「〇〇及びその関連分野」、大区分は記号で表記する。
 - 小区分：審査区分の基本単位であり、「基盤研究（B,C）（応募区分「一般」）」、「若手研究」の審査区分
 - 中区分：基盤研究（A）（応募区分「一般」）及び「挑戦的研究（開拓・萌芽）」の審査区分
 - 大区分：「基盤研究（S）」の審査区分。

2) 「若手研究」の応募要件の変更

- 若手の定義が「39歳以下」から「博士の学位取得後8年未満」に変更された。
 - 年齢に関わらず、学位取得後8年未満（産前産後休暇・育児休業期間を除く）の研究者に若手研究への応募が認められた。
 - 39歳以下であっても学位取得後8年以上経過した研究者は、若手研究へ応募することができなくなった。
- 「若手研究（A）」の新規公募が廃止となり、基盤研究に統合された。

1. 調査方法

日本看護系大学協議会（JANPU）のネットワークを用いて、会員校の各学部に JANPU 担当者へ調査依頼及び調査票を送信した。

- 1) 調査票送信日：2018年9月6日（提出期限：2018年9月28日）
- 2) 調査票送信校：社員校 277 校
- 3) 回収校：社員校 171 校（回収率：61.7%）

2. 調査結果

JANPU から社員校へ依頼する場合、学部又は学科における JANPU 担当者が回答を返信している。今回、看護教員のみと限定しなかったことから、学部又は学科を対象に調査したこととなり、学部全員の状況を回答したと判断される回答が散見された。

そのため、その他の項目に明らかに看護教員が申請しないと予測される区分が記されていた。そこで、看護教員が申請する可能性のある区分を採用し、明らかに申請しないと考えられる区分については計上しなかった。

また、「〇〇関連」として計上する場合、看護教員以外が含まれる可能性があるが、判別するこ

とは困難であるため、そのまま計上した。

以下に、科研費種類別に審査区分別の申請数・採択数・採択率を示し、結果と考察を示す。

3. 科研費種類別・審査区分別の申請数・採択数・採択率

1) 基盤研究 (S)

n=171

審査大区分	科研費 基盤研究 (S)		
	申請数	採択数	採択率(%)
大区分 A	1	0	0
大区分 D	0	0	0
大区分 I	3	1	30.3
計	4	1	25.0

【結果・考察】

大区分 I は、他の大区分が 2~8 関連分野で構成されていることに比較して、11 関連分野が含まれる。その内訳は、医学関連分野が 8、人間工学関連分野が 1、スポーツ科学・体育・健康科学関連分野が 1、社会医学・看護学関連分野が 1 であった。

採択された 1 件は、調査票の回答状況から看護学を含む医学部全体が回答されていたので、医師による申請と採択であることが考えられた。

2) 基盤研究 (A)

n=171

審査中区分		科研費 基盤研究 (A)		
		申請数	採択数	採択率(%)
中区分 8	社会学及びその関連分野	2	0	0
中区分 9	教育学及びその関連分野	1	0	0
中区分 57	口腔科学及びその関連分野	1	1	100.0
中区分 58	社会医学・看護学及びその関連分野	8	3	37.5
中区分 59	スポーツ科学、体育、健康科学関連分野	1	0	0
中区分 90	人間医工学及びその関連分野	0	0	0
中区分特設	CN02 超高齢社会研究	0	0	0
計		13	4	30.8

【結果・考察】

中区分「口腔科学及びその関連分野」において 1 件が採択され、中区分 58「社会医学・看護学及びその関連分野」において 3 件が採択され、全体の採択率は 30.8% であった。

看護学領域でこの採択率を上昇させる努力が必要である。

3) 挑戦的研究 (開拓)

n=171

審査中区分		科研費 挑戦的研究 (開拓)		
		申請数	採択数	採択率(%)
中区分 8	社会学及びその関連分野	0	0	0
中区分 9	教育学及びその関連分野	1	0	0
中区分 57	口腔科学及びその関連分野	0	0	0
中区分 58	社会医学・看護学及びその関連分野	4	0	0
中区分 59	スポーツ科学、体育、健康科学関連分野	1	0	0
中区分 90	人間医工学及びその関連分野	4	0	0
中区分特設	CN02 超高齢社会研究	1	0	0
計		11	0	0

【結果・考察】

11 件の申請があったがすべて採択されなかった。申請そのものが少ないことは否めないが、看護学領域でこの申請数と採択率を上昇させる努力が必要である。

4) 挑戦的研究 (萌芽)

n=171

審査中区分		科研費 挑戦的研究 (萌芽)		
		申請数	採択数	採択率(%)
中区分 8	社会学及びその関連分野	16	1	6.3
中区分 9	教育学及びその関連分野	16	1	6.3
中区分 57	口腔科学及びその関連分野	16	2	12.5
中区分 58	社会医学・看護学及びその関連分野	210	23	11.0
中区分 59	スポーツ科学、体育、健康科学関連分野	22	4	18.2
中区分 90	人間医工学及びその関連分野	20	1	5.0
中区分特設	CN02 超高齢社会研究	17	3	17.6
計		317	35	11.0

【結果・考察】

317 件の申請があり、35 件が採択され、採択率は 11.0%であった。また、看護学に特化された小区分が含まれる「中区分 58：社会医学・看護学及びその関連分野」の申請数は 210 件であり、23 件が採択されて、11.0%の採択率であった。この採択率を上昇させる努力が必要である。

看護学領域には、修士の学位の教員も多いが、平成 31 年度申請までは経過措置として若手研究に申請することが可能である。挑戦的研究 (萌芽) は若手が申請しやすいと考えられるので、若手教員の育成のために、今後採択率を上昇させる支援が必要である。

5) 基盤研究 (B)

n=171

審査小区分		科研費 基盤研究 (B)		
		申請数	採択数	採択率(%)
小区分 08020	社会福祉学関連	2	1	50.0
小区分 09010	教育学関連	3	0	0
小区分 09030	子ども学及び保育学関連	2	1	50.0
小区分 58010	医療管理学及び医療系社会学関連	2	1	50.0
小区分 58020	衛生学及び公衆衛生学分野関連：実験系	4	2	50.0
小区分 58030	衛生学及び公衆衛生学分野関連：非実験系	1	1	100.0
小区分 58050	基礎看護学関連	30	12	40.0
小区分 58060	臨床看護学関連	29	10	34.5
小区分 58070	生涯発達看護学関連	23	8	34.8
小区分 58080	高齢者看護学及び地域看護学関連	34	9	26.5
小区分 59010	リハビリテーション科学関連	6	2	33.3
小区分 59030	体育及び身体教育学関連	1	1	100.0
小区分 59040	栄養学及び健康科学関連	4	1	25.0
小区分 90150	医療福祉工学関連	2	0	0
計		143	49	34.3

【結果・考察】

小区分 58050～58080 は看護学に特化した小区分である。23～34 件の応募があり、採択率 26.5～40.0%であったことは、評価できる。従来と比較することはできないものの、回答校が 171 校であることを考えると、1 校当たり 0.84 件の申請となる。申請数は少ないと考えられる

「小区分 59010 リハビリテーション科学関連」は、他の専門分野と競合することが危惧された区分であった。今回 33.3%の採択率であったが、採択された 2 件は、その他の回答項目として医学系小区分が多数回答されており、看護教員以外の専門職の採択の可能性が残された。

6) 基盤研究 (C)

n=171

審査小区分		科研費 基盤研究 (C)		
		申請数	採択数	採択率(%)
小区分 08020	社会福祉学関連	39	8	20.5
小区分 09010	教育学関連	12	2	16.7
小区分 09030	子ども学及び保育学関連	13	3	23.1
小区分 58010	医療管理学及び医療系社会学関連	26	8	30.8
小区分 58020	衛生学及び公衆衛生学分野関連：実験系	11	2	18.2
小区分 58030	衛生学及び公衆衛生学分野関連：非実験系	15	0	0
小区分 58050	基礎看護学関連	272	84	30.9
小区分 58060	臨床看護学関連	224	73	32.6
小区分 58070	生涯発達看護学関連	273	85	31.1
小区分 58080	高齢者看護学及び地域看護学関連	371	103	27.8
小区分 59010	リハビリテーション科学関連	34	10	29.4
小区分 59030	体育及び身体教育学関連	6	4	66.7
小区分 59040	栄養学及び健康科学関連	23	7	30.4
小区分 90150	医療福祉工学関連	6	0	0
計		1,325	389	29.4

【結果・考察】

申請数が 1,325 件と最も多く、採択率は 29.4%であった。小区分 58050～58080 は看護学に特化した小区分であり、27.8～32.6%の採択率であったことは、評価できる。

7) 若手研究

n=171

審査小区分		科研費 若手研究		
		申請数	採択数	採択率(%)
小区分 08020	社会福祉学関連	13	4	30.8
小区分 09010	教育学関連	0	0	0
小区分 09030	子ども学及び保育学関連	6	4	66.7
小区分 58010	医療管理学及び医療系社会学関連	5	0	0
小区分 58020	衛生学及び公衆衛生学分野関連：実験系	7	2	28.6
小区分 58030	衛生学及び公衆衛生学分野関連：非実験系	11	0	0
小区分 58050	基礎看護学関連	95	42	44.2
小区分 58060	臨床看護学関連	111	45	40.5
小区分 58070	生涯発達看護学関連	82	29	35.4
小区分 58080	高齢者看護学及び地域看護学関連	138	52	37.7
小区分 59010	リハビリテーション科学関連	31	5	16.1
小区分 59030	体育及び身体教育学関連	5	4	80.0
小区分 59040	栄養学及び健康科学関連	17	7	41.2
小区分 62010	生命、健康及び医療情報学関連	1	0	0
小区分 90130	医用システム関連	1	0	0
小区分 90150	医療福祉工学関連	2	1	50.0
計		525	195	37.1

【結果・考察】

申請数は 525 件であり、採択率は 37.1%と高かった。小区分 58050～58080 は看護学に特化した小区分であり、35.4～44.2%の高い採択率であったと考えられる。

自由記載からは、博士の学位を取得した教授が若手研究に応募したことが伺われ、その結果として高い値になっている可能性が残された。若手研究者育成に向けての支援体制が望まれる。

科研費種別	影響ありの回答校数	科研費種別	影響ありの回答校数
基盤研究 (S)	0	挑戦的研究 (開拓)	7
基盤研究 (A)	3	挑戦的研究 (萌芽)	21
基盤研究 (B)	5	若手研究	23
基盤研究 (C)	8	—	—

1) 基盤研究 (A) への影響

- 看護領域ではなくなったことで、応募しにくくなった。審査委員に看護学研究者ではない人が多く含まれることから、看護学研究方法である質的研究は理解されないことが懸念される。
- 看護学以外の関連分野と競合するので、採択されにくくなった。
- 他学問領域と同じテーブルで審査されることに疑問がある。

2) 基盤研究 (B) への影響

- 小区分の変更に伴う影響がある。

3) 基盤研究 (C) への影響

- 研究課題が該当する区分について不明瞭な場合がある。
- 専門領域の異なる審査員による審査を念頭に置いた書類作成が必要になった。
- 大半の受け皿が基盤Cとなって応募件数が増え、競争が激しくなり採択件数が減少した。

4) 挑戦的研究 (開拓) への影響

- 助成額が高くなったことは良いが、採択率が低いので競争率が高まり、応募が難しくなった。
- 新しい評価基準の詳細が事前に把握できなかった。
- 「挑戦的」の定義が一層明確となったことで申請時に適切な種別が選べることとなった。

5) 挑戦的研究 (萌芽) への影響

- 審査の結果通知が6月～7月と遅いため、研究開始時期が遅れることが懸念される。
- 採択率の大幅な減少があり、採択基準が引き上げられたため、採択が厳しくなった。
- 新しい評価基準の詳細が事前に把握できなかった。
- 事前の選考が不透明であり、3段階と増えることから応募しにくくなることが懸念される。

6) 若手研究への影響

- 年齢制限が廃止されて、多様なキャリアの研究者が応募しやすくなり評価する。
- 年齢制限が廃止されて、40歳以上の博士取得者(8年以内)の応募件数が顕著に増加した。
- 若手の定義変更により、39歳以下で博士の学位のない研究者が応募できなくなった。
- 学位取得後8年以上経過した39歳以下の若手研究者は、応募することができなくなった。
- 看護学研究者は、学位取得後に臨床へ戻る場合もあるため、若手研究者に位置づけられる者であっても、申請が出来なくなることが懸念される。

5. まとめ

- 1) 基盤研究 (S) では、大区分 I に 11 中区分が含まれ、他の大区分と比較し競合が激しい。
- 2) 基盤研究 (A) 及び挑戦的研究 (開拓・萌芽) では、中区分 58 を中心に申請されているが、社会医学や関連分野との競合がある。
- 3) 基盤研究 (B) 及び基盤研究 (C) では、看護学に特化された 4 小区分があり、30%前後の採択率を得ている。4 小区分に応募が集中することにより、採択総数が減少することが懸念される。
- 4) 若手研究では、定義の変更により、40 歳以上の研究者が応募できることを評価する意見、博士の学位のない 39 歳以下の若手研究者が申請できなくなったことを懸念する意見に分かれた。
- 5) 関連分野との競合があるので、看護学研究者以外の審査員にも理解できる申請書の工夫が必要である。
- 6) 看護学教員には博士の学位を持たない 39 歳以下の研究者が存在するので、今後の支援策を検討する必要がある。

(分析担当：日本看護系学会協議会 公的研究費拡大推進担当理事 鎌倉やよい 野嶋佐由美)